

## “研究” 雑感



若者

東海明宏\*

私は昭和63年3月に博士課程を修了し、4月より研究室の助手として勤務しているものです。学部課程で北大の工学部衛生工学科を卒業し、修士課程で東京水産大学の海洋環境工学専攻課程で沿岸海洋汚染の研究をおこないました。そこで得られたことは、ごく短絡的なことではありますが、海洋汚染の源は陸上であり、陸上での人間活動の制御・評価がより大事であるということでした。現在は化学物質の環境リスク評価・管理という化学物質（有機化合物）を素材としてとりあげ、それらの利用にともなう人間にとっての便益と環境との相互作用で生ずるところのマイナス面を解析することを研究課題としております。

外国ではその人の専門を問う場合にメジャー、マイナーといういいかたがあることをききます。その点からすると、いまの私はメジャーよりもマイナーの手の数が多いのかもしれませんが。

修士課程を終え博士課程に進むときに思っていたことは、一番自分の得意と思っていることを一旦、ないものと考え否定することによって新しい自分の境地がひらかれるのではないかということでした。見方をかえればこれは、たいへん傲慢な考え方なのかもしれません。本来ならば、自分が未熟なまま別のテーマに移るなどとは言語道断で十分なトレーニングをつんだうえでその分野での、一つの領域での先端の部分で勝負することが不可欠なのだと思います。いわば主流ではない考えのながれでいまの自分にたどりついたともいえます。

前述した私の研究課題は、従来の分類からす

ると必ずしもうまくは分られません。従って学際的研究といえるかもしれません。学際的研究ということに関し、中根千枝先生<sup>1)</sup>は、研究者に2つのタイプがあるということを指摘しています。

ひとつは自分の専門分野に安住していて他の専門研究者にわからないジャーゴンを使うことに疑問をもたないひと、もう一つは自分の専門分野から容易にソトにでて他の専門分野にかかわる一知半解の知識でその才と器用さにまかせて意見を得々と被歴するひとだそうです。学際的研究とは異種の専門の研究者が自分達の用語、概念、基本的アプローチを明確に相手に伝えあうことを底辺にもつ研究プロセスそのものであるとのことでした。

あまいレベルでそのどちらのタイプにも自分はおちいってしまう危険をはらんでいるように思えます。しかし、主流に対する雑がなければ学際がうまれないのもまた事実であると思います。その雑について感じていることをかいてみたいと思います。

## 自己管理は必要か？

「“研究”に雑感情は不要であり、あつては困るものである。その人の集中力の欠如、思考回路の鈍さのあらわれであり、あつてはいけないものである。」と、一般論で片付けられないものが研究の新たな展開を生み出す原動力となりうるのではないかと思います。というのは、学生、大学院生時代を通じて、むしろ、悩みを抱え込んでいた時のほうが研究の進展を感じたことがあるからです。

自己管理ができるようなものには普通以上の

\*東海明宏(Akihiro TOUKAI), 大阪大学工学部, 環境工学科, 第六講座, 助手, 工学博士, 環境工学

ことは望めない、という考えがありました。傍若無人と、はた目にはうけとられようとも自分のペースで研究をしている人に対し私は彼なりの強い意思のあらわれを見てしまいます。自分自身をうまく使いわけてソツのないようなものには大きなことはできないといった考え方でしょうか。しかし、いつでも自分の軌道を修正できることも必要です。ゆるいしぼりのなかに自分をおき、ここぞというときに必要なものといったことだと思います。研究の原動力に、頑張り抜いてほめてもらいたいことを念頭においていた時期がありました。むしろ自分の充実感はこの次といった時期もありました。すなわち規範としてこれこれが見たされればよいとするといった自己管理はあまり必要ではなさそうだと思います。

そういった生身の人間として研究に立ち向かう時、最近感ずることは、出会いという言葉です。これはひととの関係だけに使われることばではないと思います。ひととの出会いがあって、別れがあるのと同じように、研究テーマ、ある着想にしても出会いと別れがあると思います。ことによると小さな出会いと別れを何度も繰り返してしまう、そのようなテーマが自分にとってのライフワークなのかもしれないとおもっています。

研究をすることのいったい何がすばらしいのだろうか？

研究室にはいつてくる学生のすべてが研究者になるわけではないようです。さすれば、1科目としての研究は彼（彼女）にとっていかなる意味があるのか。おおげさな言い方になってしまいますが、自分の限界をしる、教官はそれをしらしめることではなかろうかと思えます。限界はその人のもつ能力の限界ではなく、時間、いままでに蓄積されたもの、などの要因の制約条件のもとでできる限界です。自分はこれ以上のなにもものでもない、そういう感情に到達したときにはじめて自分自身から自由になるといいます。新しい自分の境地にいたるわけです。つまり、1つのテーマを理解することで、そのテ

ーマから自由になり次の課題へと移ることができるわけです。

これは京大アメリカンフットボール部監督の水野さん<sup>2)</sup>のことばを研究にあてはめてみた場合にでてくる考えです。

### 環境工学と哲学

物理学は自然の雑のことわりを明らかにする学問であり、認識の世界での雑、ゴミ（忌み嫌われているもの）をあつかうのが哲学であり、 $x$ ,  $y$ ,  $z$ ,  $t$ でできる世界では環境工学が哲学の役をになっていると末石教授になりました。雑こそが新しいものを生み出すポテンシャルをもったものなのだ、と。さすれば、雑感情にとらわれている自分はメタモルフォーセスの直前なのかもしれません。

### 若者は勝負する

要は、率先垂範にあると思います。軽薄な言い方ですが、老人に対しての若者との違いのひとつは率先垂範できることであり、競争相手と勝負することであると思います。若者は年齢によってラベルされるものではないと考えています。

以上が雑感情の一部です。日本の社会も「でる杭はうたれる」から「でる杭は使われる社会」に変わっていくと思います。その意味で私の役割のひとつは自身の研究だけに自己完結的になってしまうのではなく、まさに若者を自分が相手と勝負することで育てる事だと思います。これからも雑として忌み嫌われるものをうけいれること、排除しないことを心がけていこうと思っています。終わりに、本欄への執筆をすすめていただいた盛岡 通先生に謝意を表します。

### 参 考 文 献

- 1) 中根千枝(1988) 学際的研究とは？ 学術月報, Vol. 41, No. 8, p. 5
- 2) 水野弥一(1987) スポーツとは何か, 7.19付け毎日新聞社夕刊